認定医症例報告

ブリッジと義歯を併用して欠損補綴を行った1症例

池谷 完治

A Case Report of Prosthetic Rehabilitation Using Fixed and Removable Partial Dentures

Iketani Kanji

抄 録

症例の概要：残存歯数 14, 咬合支持数 3, Eichner 分類 B3 の前臼歯欠損症例に対して, 上顎前歯部は固定性ブリッジ, 上下顎臼歯部は可撤性義歯により補綴治療を行った。

考察：治療用義歯やプロビジョナルレストレーションの使用が最終補綴へのスムーズな移行につながった。患者の適切な自己管理と上顎前歯部をブリッジにて補綴したことが長期にわたる良好な経過に寄与したものと考ええる。

結論：ブリッジおよび義歯の装着により審美, 咀嚼機能が改善され患者の十分な満足が得られた。選択した補綴方法により 10 年間にわたり咬合崩壊が抑制された。

和文キーワード

固定性ブリッジ, 可撤性義歯, メインテナンス

ABSTRACT

Patient : The patient was a 62-year-old man with both missing teeth and teeth that needed to be extracted. His major complaint involved problems of aesthetic and masticatory function. After the maxillary anterior teeth were extracted, fixed and removable partial dentures were delivered for the maxillary and mandibular jaws, respectively. This clinical report describes the effectiveness of this patient's prosthetic rehabilitation and maintenance for 10 years.

Discussion : Using provisional restorations and treatment dentures, definitive prostheses could be well designed. Long-term satisfactory progress would be achieved since he properly managed his oral health and a fixed prosthesis was delivered to the maxillary anterior. However, various problems may arise in the future due to aging.

Conclusion : The collapse of occlusion was prevented by appropriate prosthetic rehabilitation for 10 years.

Key words

fixed bridge, removal partial denture, maintenance

図1 Intraoral views and panoramic radiography at the first examination
初診時の口腔内写真およびパノラマ X 線写真

I. 緒 言

可撤性か固定性かの欠損歯列の補綴方法の選択はさまざまな因子を考慮する必要がある、容易ではない。また術後の結果の判定も難しい。そこで今回、上顎前歯中間欠損は固定性、上下顎の臼歯部欠損は可撤性にて補綴した症例において処置後 10 年間の経過を観察したので報告する。

II. 症例の概要

患者：62 歳（初診時）、男性。

初診：平成 6 年 12 月。

主訴：5 6 冠脱離に伴う咀嚼障害及び前歯部の審美障害。

既往歴：数ヶ月前より下顎両側臼歯部の違和感や咬合痛を自覚していたが放置していた。

現病歴：平成 6 年 12 月 5 6 冠脱離に伴う咀嚼障害にて来院した。

現症：上顎は 4 1 4 6 欠損で、欠損部には ⑤ 4 ③、② 1 ① および ⑤ 6 ⑦ のブリッジが装着されていた。下顎は 7 6 5 7 欠損で 5 ④ ③ ② の延長ブリッジが装着されていた。ブリッジの支台である 2 1 お

よび 5 は保存不可能な状態であり、7 は頬側根に破折が認められた。また、6 および 8 は残根状態であった。口腔清掃状態は良好であり、歯周疾患も保存不可能な歯以外は中等度の状態であった（図 1）。

診断と治療方針：2 1 および 5 1 は保存不可能と診断した。また、残根状態の 6 および 8 も抜歯としたが、遊離端を回避するため 7 は破折している頬側根のみを抜去することにした。

治療方針としては、まず左側上下の臼歯を抜歯後ただちに上下治療用義歯を装着し、咬合支持を回復させることにした（図 2）。最終補綴装置は患者の希望および残存歯の歯周組織やカリエスの状態から上顎前歯部は固定性、上下顎の臼歯部は可撤性による補綴を選択した。

III. 治療内容と経過

1. 治療内容

平成 7 年 1 月、抜歯予定の 5 8 および 1 6 を抜歯後ただちに上下治療用義歯を装着した。義歯装着 4 ヶ月後患者が義歯になったことを確認し、2 1 を抜歯し義歯に増歯を行った。また、4 は当初保存予定であったが、歯根破折が認められたため抜歯とした。補綴前処置として上顎では 5 3 2 3 7、下顎では

図2 Intraoral views after teeth extraction
抜歯後の口腔内写真

図3 Intraoral views at the delivery of prostheses
治療終了時の口腔内写真

3|1 5 に歯髄処置を行い、併行して歯周治療も行なった。7 は歯周治療時に破折している頬側根を抜去した。

治療開始から10ヵ月後の平成7年10月、補綴前処置が終了し歯周組織の状態も良好となったため、5 + 3 にプロビジョナルレストレーションを装着し、歯冠形態の確認を行った。

最終補綴装置は、まず3 にセラモメタルクラウンを装着、続いて5 に磁性アタッチメントを装着した。下顎の歯冠補綴終了後の平成7年12月上顎に5 4 ③ 2 1 | 1 ② ③ のセラモメタルブリッジを装着した。義歯の鉤歯となる3 には義歯との一体化を考慮して口蓋側にミリングを付与し、7 にはミドルコーピングを装着した。歯冠補綴終了後の平成8年2月上顎臼歯欠損部に金属床義歯を装着した(図3)。

2. 経過

補綴終了時より6ヶ月ごとのメンテナンスを今日

まで10年間行っている(図4)。

良好な経過をたどっていたが、義歯装着2年目から右下義歯床の破折を繰り返すようになった。これは対合歯が挺出しているため、同部の人工歯に十分な厚みがとれないことが原因である。また、平成17年5月、外傷により2 1 部のセラミックが破折したが、充填用コンポジットレジンにて修理可能であった。

補綴処置終了後約10年経過する現在、残存歯や義歯に大きな問題はなく良好に経過している。

IV. 考 察

本症例においては治療用義歯やプロビジョナルレストレーションを用いたことが最終補綴へのスムーズな移行へつながったものと思われる。また、上顎の遊離端欠損を回避するため7 の口蓋根を保存したこと、すれ違い傾向への対策として上顎前歯部をブリッジで修復し下顎前歯部の突き上げに対処したことが、良好

図4 Intraoral views at 9 years and 10 months after prosthetic rehabilitation
義歯装着後9年10ヶ月の口腔内写真

な予後に寄与したものと推察できる。さらに、長期の良好な予後を得るためには、最終補綴前に患者へのモチベーションを含む前処置をしっかりと行うことも重要と考えられた。

メンテナンス中に起こった下顎義歯の破折に関しては、メタルティースを使用するなど設計時に強度へ

の対応をしておくべきであったと反省させられた。

また患者の年齢も70歳を超え、転倒によるトラブルなど高齢に伴う問題も加わってきたが、メンテナンスを今後も継続し、最終的には訪問診療も含め対応していきたいと考えている。

V. 結 論

残存歯数14, 咬合支持数3, Eichner分類B3の前臼歯欠損症例に前歯部は固定性ブリッジ, 上下顎臼歯部は可撤性義歯を装着した。下顎右側遊離端欠損部においては対合残存歯からの強い咬合力のため義歯床レジジン部の破折を繰り返しているものの、補綴処置終了後は大きなトラブルもなく経過している。選択した補綴方法が10年間にわたり咬合崩壊を抑制してくれたと判断される。今後さらにメンテナンスを行いつつ経過観察を続けていく所存である。

文 献

- 1) 宮地建夫. 欠損歯列のレベルとリスク. 補綴臨床 37: 481-509, 2004.
- 2) 日高豊彦, 南 昌宏. PART1 検査・診断・治療計画・治療・メンテナンス. 補綴臨床 別冊基本 歯冠修復治療: 20-101, 2003.

著者連絡先: 池谷 完治

〒223-0053 横浜市港北区綱島西5-23-27

TEL: 045-545-8844

FAX: 045-545-8828

E-mail: Ike-dent@ae.catv.ne.jp